
編集後記

今月号の特集の一つは、「対テロ戦争20年を振り返る」である。昨年の8月の米国のアフガニスタン撤退後ガリ政権が崩壊しタリバン新政権が誕生したことは驚きだった。米国の支援による民主政権とは何だったのか、タリバン政権が生まれた事実に向き合うことが肝心だ。あれから半年を過ぎた本年2月24日ロシアがウクライナに侵攻した。欧州が再び戦場となり「新冷戦」の開始の兆候さえある。第1次世界大戦から第2次世界大戦の戦間期になぜ危機を防げなかったのか、E・H・カーの名著『危機の20年』の国際政治のリアリズムを再び思い起こし、我々はなぜ平和を脅かす対テロ戦争やウクライナ戦争が続くのか、2001年から2021年までを『新危機の20年』として深く考えていく必要がある。

さて、本号の最初の山田論文は、アフガニスタンの現状を手掛かりに、テロリズムを平和構築の枠組みの中でいかに捉えるのか、国連における平和構築概念の変化、テロリズムの系譜を辿って現代的テロリズムを考え、統合か人権擁護かの国家のテロリズムへの関わり方について論じているが、テロリズムは無辜の民びとや人類にとって脅威であり、グローバル・ガバナンスの視座が必要であるという山田の指摘は重要である。

林論文は、近代アフガニスタンの歴史を振り返り、タリバン政権がなぜ再登場したのか、その原因を探っている。その原因として、アフガニスタン・イスラム共和国の国家行政機構の弱さと深刻な汚職があり、米国や多国籍軍の軍事行動に対するアフガニスタン国民の怒りがあり、農村社会を基盤としたタリバンの隆興を挙げていることに同感する。

今回西日本新聞の中原興平記者にもご寄稿いただき、中村哲医師にアフガニスタン現地で直接取材した経験を基に、中村医師の実践の学びからアフガニスタン戦争を論じてもらった。中村医師が銃撃された同じ車に同乗し、中村医師に引率したNGOの幹部候補生だった運転手、護衛たちの失われた命の重さに思いを寄せながら、人類は未来永劫に戦争を起こしてしまうのかという中原記者の痛切な声が聞こえてくる。

次に、松下論文は、前号に続く特集2として、「V 人類的課題と実践的課題」「パンデミックを超えて」を述べているが、その中で資本主義に抗するデモクラシーとして、ハーヴェイの〈場所の政治学〉を重要なアプローチとして取り上げ、「コモンズの位置と役割」に注目し、新自由主義のオルタナティブの構想として「連帯経済」を取り上げていることは注目できる。

鰐部投稿論文は、マイクロ・ファイナンスのグラミン銀行のこれまで論議をまとめ、同銀行を鋭く批判した力作で大変興味深く読んだ。投稿者には次回是非MFに関するフィールドワークを含めた独自の調査を実施してもらい、MFの真の功罪を明らかにしてもらいたい。

さらに、「資料からたどるアジア・アフリカ研究所の60年」は、藤田和子監事(元代表理事・編集長)にまとめていただいた。藤田監事のご尽力に感謝申し上げたい。

最後に、今回の本誌の編集作業は、福島浩治理事(編集担当)を中心に行ったことを付記する。

(2022年4月19日 編集長 重田康博)

アジア・アフリカ研究

2022 年 第 62 卷 第 2 号 (通巻 444 号)

2022 年 4 月 25 日発行 機関購読料：年間 15,000 円

編 集 人 重 田 康 博

発 行 人 中 野 洋 一

発 行 所 特 定 非 営 利 活 動 法 人
ア ジ ア ・ ア フ リ カ 研 究 所

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 2-17-10

Tel&Fax: 03 (5972) 4740

E-mail: aaken@bz01.plala.or.jp

URL: <http://www.aaij.or.jp/>

印 刷 所 三 和 印 刷 (株)
長野県長野市川中島町 1822-1

本誌上で各論考の著者がその責任において述べた意見は、特定非営利活動法人 (NPO 法人) アジア・アフリカ研究所としての見解を表わすものではありません。

The articles in *Quarterly Bulletin of Third World Studies* do not represent the views of The NPO Corporation Afro-Asian Institute of Japan (AAIJ). Responsibility for opinions expressed in them rests with their authors.